

赤い鼻と魚の尾と豚の目をした醜い姿で、水に潜る赤い帽子をかぶり海底で人間の魂を集める。(井村君江)

人形劇 うけきょ 一定の目的で人形を操作することが古代からあったことは、エジプト、ギリシア、インド、中国などで記録されているが、これらは、からくりや糸操りであった。その後、棒使い人形、影絵劇、片手使い人形なども広まるが、発展の中心はアジアにあった。我が国は、棒使い人形を中心に、からくり、糸操り、片手使いなど豊富な形式を發展させて、高度な人形劇芸術を生み出した。ヨーロッパではイタリアの影響のもとに各国が独自の人形劇をもったのは一七世紀以降のことであった。近世から近代にかけて世界共通の現象として、民衆に愛された片手使い人形の進出がある。現代人形劇は、一九二〇年代の演劇運動、美術運動の中から起こったが、世界中に急速に普及したのは、子どものための文化財としてである。我が国でも第二次大戦後この面でめざましい發展定着をみせ、多くの専門劇団を生み、アマチュアの活動も地域を中心に盛んに行われている。

(宇野小四郎)

- 任 大星 たいせい → レンターシン
- 任 大霖 たいりん → レンターリン
- 任 徳耀 とくよう → レンドウヤオ

又

ヌワバ フローラ Flora Nwapa 一九三一〜 ナイジェリアの作家、教育者、出版人。アフリカ女性の生き方をテーマにした大人向けの小説『Efun エフル』(一九六六)、『Idu イドゥ』(一九六九)、『One is Enough 一つでたくさん』(八二)などを書いて国際的に知られるが、一九七七年にはエヌグに印刷・出版会社タナ・プレスを創立し、アフリカ人作家および画家による児童書の出版と普及に努めている。自作の児童向け作品に『Mummy Water ぶしおな湖』(七九)、『Journey to Space 宇宙への旅』(八〇)などがある。(あへまゆみ)